

[研究ノート]

# 児童文学を用いて、子どもの心に響くことばは何かを見つける

—仮説的検討—

道信 良子<sup>1)</sup>・上谷 祐子<sup>1)</sup>・山田 恵子<sup>2)</sup>

## 要旨

**目的：**「子どもに読み親しまれてきた絵本や児童文学のことばは子どもの心を響かせる」という仮説を立て、絵本や児童文学で用いられていることばにある音の特徴を明らかにする。

**方法：**日本の子どもたちに読み親しまれている絵本や児童文学から19冊を選別し、作品の中心となることばにある特徴を音韻論（ことばがどんな音から成り立っているか）の視点から分析し、絵本の音が子どもの心に与える影響を仮説的に検討した。

**結論：**今回、子どもはことばがもつ音による働きかけによって周りの世界を知り、相手の語りを受け入れ、他者とともに生きていく力を育んでいくのではないかという視点から、母音の多用や同音の反復など、絵本や児童文学にある音の特徴を明らかにした。

## はじめに

今まで行われている絵本や児童文学に関する研究の多くは、本の内容についての分析であり、子どもの聴覚に訴える「音」が子どもの心に与える影響については、十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、「子どもに読み親しまれてきた絵本や児童文学のことばは子どもの心を響かせる」という仮説を立て、それを検証するための最初の段階として、絵本や児童文学の語りに見られる音の特徴を明らかにしていく。本研究の仮説には、子どもは成長過程で自らの文化のことばに慣れていき、その慣れ親しんだことばの音を通して、他者とかかわり、他者を想う心を育んでいくのではないかという思いが込められている。

言語の分析には、音韻論（ことばの音とそのパターン）、形態論（語を構成する仕組み）、統語論（文を構成する仕組み）、意味論（ことばの意味）、ことばの社会性など、複数の視点からの分析の方法がある（Fromkin and Rodman, 1988）が、音韻論に着目し、子ども向けの本を音の観点からとらえると、そこには、人間が発する声（音）の数だけの多様性があることがわ

---

受付日 2024.5.8

受理日 2024.5.30

所 属 1) 福井県立大学看護福祉学部 2) 元札幌医科大学・医療人育成センター教養教育研究部門

かる。本の内容を伝える言語は、世界の言語に翻訳可能であるが、一冊の本を構成することばの音やパターンは、その言語を話す人々の身体に固有のものであり、類似する音はあるとしても、「翻訳」することはできない。

したがって、子どもが成長する過程で接する絵本や児童文学を、その本で用いられていることばの「音」に着目して分析することで、子どもがどのように周りの世界を認識し、相手の語りを受けとめていくのか、さらには他者とともに生きていく力がどのように育まれていくのかという子どもの心身の発達において、「音」が果たす重要な部分を明らかにすることができる。と考える。

そこで、本研究では、そのはじめの一歩として、子どもに読み親しまれてきた作品を、その音の成り立ちに着目して分析する。

## 方法

日本の子どもに広く長く読み親しまれている絵本と児童文学を選別し、それぞれの作品の中心となることばの特徴を、音韻論（ことばがどんな音から成り立っているか）の視点から分析する。特に、各作品のテキストのキーワード（登場人物の名前、伝えたいメッセージ、ストーリーの展開を支えることばなど）に留意しつつ、そのキーワードが多く盛り込まれているページを中心に分析する。

次に、それらのキーワードを構成する音が、物語全体にどのように配置され、どのような流れで構成されているのかなどの分析を通して、ことばの音素のまとまり、つらなりを作品毎に明らかにする。最後に分析した作品に見られる音の類似性や特徴あるいは相違点を分析する。以下にその具体的な分析に至った手順について説明する。

### 1. 選別基準 1

分析を行うにあたり、分析する本の選別条件を検討した。選択の条件と条件付けの理由を表 1 に示した。

表 1 選別基準 1

選択の条件	条件付けの理由
A. 主に、小学生と中学生を対象にしている	A. 意味論の分析のため
B. 作者が、ことばの音に関心をもっている	B. 音韻論の分析のため
C. ひらがなが、多く使われている	C. ひらがなが音を奏でるため
D. 世界で、翻訳されている	D. 内容の普遍性
E. 子どもの視点で、書かれている	E. 子どもへの愛情をあらわすため
F. 詩や短編である	F. 分析が容易である
G. 小学校の教科書に採用されている	G. 子どもが公平に読むことができる

表1に示した条件をもとに、試験的に以下の5つの作品を比較した(表2)。この表に示されるように、AからFの7つの条件をすべて満たす作品は限られており、比較した5つの作品のうちすべての条件を満たした作品は、谷川俊太郎の「朝のリレー」『谷川俊太郎詩集』(角川書店1981)、『光村ライブラリー 中学校編』(光村図書出版 2005)のみであった。

表 2 5つの作品の比較

	A	B	C	D	E	F	G
谷川俊太郎 朝のリレー 『朝のリレーほか』	○	○	○	○	○	○	○
金子みすゞ 作品集	○	○		○	○		○
マーガレット・ワイズ・ブラウン 『すてきなうち』 野中柊訳			○	○	○		
アルフォンス・ドーデー 『チビ君』 内藤濯訳	○		○	○			
サン＝テグジュペリ 『星の王子さま』 内藤濯訳	○	○	○	○			

## 2. 選別基準2 および作品の試験的分析

選別基準1では、表2に示したように、選別される対象となる作品に限りがあることが明らかになったため、選別基準を表3に示した3つの基準に絞り、筆者らのうち2名がそれぞれひとつの作品を音素に分けて、試験的に分析を行った後、本格的な分析を行った。

表 3 選別基準 2

選択の条件	条件付けの理由
A. 作者が、ことばの音に関心をもっている B. 子どもの視点で、書かれている C. 詩や短編である	A. 意味論の分析のため B. 子どもへの愛情をあらわすため C. 分析が容易であるため

構造言語学によると、音韻理論には複数の理論があり、そのため音素の分解の様式にも複数の方法がある(Fromkin and Rodman, 1988)。当初、国際基準であるThe International Phonetic Alphabet (Revised to 2015)を参照することが普遍性があると判断したが、日本語の音素に適応しない音素が多く、困難が生じたので、最終的に金田一春彦(1988)による日本語の音素論(P. 95-100)を参照して、分析を行った。具体的には、分析したい作品をひらがなで表記したのち、音素表記を行い、作品に使われている音素の特徴を分析した。

## 結果

### 1. 分析した作品

試験的な分析の結果をふまえ、筆者らが分析に適していると感じた作品を選別基準 2 に即して選び、分析を行った。分析した作品の名称や著者名などを表 4 に示した。

表 4 分析した作品

	作 品 名	作 者	訳 者	発 行 所
1	星の王子さま	サン＝テグジュペリ	内藤 濯	岩波書店
2	チビ君	アルフォンス・ドレー	内藤 濯	岩波少年文庫
3	野原はうたう 『のはらうた』	工藤 直子	—	童話屋
4	「あ」のつくひ 『うたのてんらんかい』	工藤 直子	—	理論社
5	すてきな おうち	マーガレット・ワイズ・ブラウン	野中 柊	フレーベル館
6	スイミー	レオ＝レオニ	谷川 俊太郎	好学社
7	朝のリレー	谷川 俊太郎	—	光村ライブラリー 「中学校編」
8	ネッシーぼうや	うちだ りさこ	—	福音館書店
9	なまえのないねこ	竹下 文子	—	小峰書店
10	しょうぼうじどうしゃ じぶた	渡辺 茂男	—	<こどものとも> 傑作集福音館書店
11	わたしのワンピース	西巻 茅子	—	こぐま社
12	あれ みるくかな？	チャールズ・G・ショウ	やがわ すみこ	ほるぷ出版
13	できるかな？ あたまからつまさきまで	エリック＝カール	くどう なおこ	偕成社
14	おおきなかぶ	ウクライナ民話	内田 莉沙子再話	<こどものとも> 傑作集福音館書店
15	てぶくろ	ウクライナ民話	うちだ りさこ	福音館書店
16	おおきな おおきな おいも	赤羽 末吉	—	福音館書店
17	どろんこ ハリー	ジーン・ジオン	わたなべ しげお	福音館書店
18	からす たろう	やしま たろう	—	偕成社
19	だんまり こうろぎ	エリック＝カール	わたなべ しげお	偕成社

### 2. 音韻論による分析結果

音韻論に着目した分析から、現段階で、次のことを明らかにすることができた。

- (1) 音素の視点での分析では大切なのはキーワードそのものではなく、ことばとことばをつなぐ助詞、用言や体言に意味をそえる助動詞であった。

- (2) 音素のつらなりは、助詞や助動詞にあった。
- (3) 音素に分解すると、キーワードは、重要ではなくなる。
- (4) 音素に分解すると、繰り返されているキーワードよりも、「韻」が大切になってくる。韻を踏むことによって、文章や詩に、一定のリズムを作り、響きの心地よさや美しさを作り出している。
- (5) 文末が /a/ で終わる作品『すてきな おうち』や、逆に文頭に /a/ が頻出している作品『あれ みるくかな?』があった。
- (6) /u/ の母音が圧倒的に多く使われている『てぶくろ』。
- (7) /Q/ の音（促音便）を多用している作品『スイミー』、『おおきな かぶ』や、/Q/ 促音便や /N/ 撥音便が汎用されている作品『どろんこ ハリー』があった。
- (8) 全体として、作者は、ことばを音と理解し、ことばを音の視点から探究している。それが、子どもの心に響かせようとする工夫につながっていると推察された。

### 3. 分析した本の全体的な特徴

#### 3.1 幼い子ども向けの絵本について

- (1) 文章が短く、テンポが良い。
- (2) フレーズの繰り返しが多く見られる。
- (3) オノマトペをたくさん使用している。
- (4) フレーズの多くが体言止めである。
- (5) 「かな」など、問いで終わる特徴が見られた。

#### 3.2 幼児期以降の本について

- (1) 一つひとつの文章が幼児向けに比べると、長くなっている。
- (2) 物語の内容に合わせて、「です・ます」調と「だ・である」調を使い分けている。
- (3) フレーズの繰り返しは、幼児期以降の本についても見られる。
- (4) 幼児期以降の本は物語性を持つようになるため、幼児向けの本に比べて、音に対しての特徴は少ない印象である。
- (5) 音の変化は、文章の文体と会話の文体に差をつけることによって、生じている。
- (6) オノマトペや撥音便、促音便の使用を組み合わせている。
- (7) 同じフレーズの繰り返しなどの工夫によって、文章のリズム感や緩急感を出している。

### 考察

本研究では、絵本や児童文学の語りに見られる音の特徴を明らかにすることにより、「子ども

もに読み親しまれてきた絵本や児童文学のことばは子どもの心を響かせる」という仮説を検討した。19冊の作品を分析した結果、絵本のことばには、子どもの年齢に応じた音の選別や、繰り返しの音素の配列などの特性があることを明らかにすることができた。以下、このような子ども向けの絵本の音を成り立たせている特徴について、考察していく。

今回、『のはらうた』など、詩集の分析も行った。詩には、句読点がなく、句読点がないことが単純なリズムを作り、読者の心に伝わりやすくなるのではないかと考える。句読点が生まれたのは明治時代（1906年）と言われているが、わずか120年ほど前のことである。句読点のない詩の形態は、短く解りやすい音が多い。それは、話し言葉・口語に近く、子どもの心に響きやすい（伝わりやすい）からではないだろうか。話し言葉に句読点は要らないように、子どもへの語りかけには、長文を読むときに必須である「息継ぎ」を意識する必要がないのかもしれない。

筆者らは当初、音韻論の分析を国際基準で始めたが、「音」にはそれぞれの文化のなかで身体を通して受け継がれてきた特性があるため、国際基準での「音」の分析は、子どもの本を対象にして心に響くことばを探る、という観点からは適さないことがわかった。言語学の歴史をふりかえってみると、構造言語学の立場から、記号論、記号論理学など音韻を国際基準で細かく分析する理論（Chomsky 1957, 1959）は衰退している。その後の、日常言語論（Austin 1976）も衰退しているが、日常言語が運用される場に着目した理論的研究（Performance theoryなど）は盛んになっている（Bruner 1984）。

それでは、人の言語が人間の身体にどのような影響を与えるかという点については、どのようにアプローチすればよいのだろうか。本稿で着目してきたように、人間の発する「音」に着目し、音の世界を探究している研究者は世界各地で活躍している。たとえば、フランスの洞窟での音響の研究、人類学、考古学 音楽療法にも精通しているイゴル・レズニコフ氏（Reznikoff 2013）、ラップ音楽の音韻に着目した言語学者の川原繁人氏（川原 2023）などである。しかし、絵本や児童文学の世界においては、「音」に着目した研究は主流ではなく、ことばの意味や内容の方に焦点が当てられているものが多い。

近年、認知科学において、言語の意味が処理される運動感覚領域の働きに、言語の相対性（linguistic relativity）と呼ばれるそれぞれの文化の言語に特有の特徴が関与しているという研究が展開されている（Kemmerer 2023, 今井2024）。同様の研究において、子どもが言語を獲得していく過程において、子どもが周囲の音から抽象的な意味を読み取っていることを明らかにした研究もある（Imai and Akita 2023）。「音象徴（sound symbolism）」と呼ばれる現象であり、視覚と聴覚の間の類似性に基づいている。本研究においても児童文学にオノマトベが多用されていたことを明らかにしたが、乳幼児がオノマトベを好み、また、大人が乳幼児へ語り掛けるとき、音象徴を含むことばを多用するという研究結果が最近報告されている（今井 2024）。



今後、人間の身体から発せられる「音」の表象性やその具体的な作用に関する研究が進んでいくことと思われる。

筆者らは、絵本の音が子どもの身体に働きかけることにより、子どもが自分の意思を育み、他者とともに生きていく力を育んでいくのではないかと考え、本研究に着手した。しかし、言語の役割を明らかにするには、冒頭で述べたような、音韻論（ことばの音とそのパターン）、形態論（語を構成する仕組み）、統語論（文を構成する仕組み）、意味論（ことばの意味）、ことばの社会性などの複数の視点を持つことが肝要ではないかということに、今回の音韻論に着目した分析過程で気づいた。今後は、認知科学における近年の理論を含めて、他の理論や、異なる視点による分析も必要と考える。

今回、絵本や児童文学の「音」に特化した分析を行い、複数の共通する特性が明らかになった。短い、同じテンポの音が多く使われており、そのような音が、子どもの心を響かせるのではないだろうか。統語論の視点から考えると、音のつらなりについては、感動詞、連用形などの文法的な解析も今後必要になってくるだろう。具体的には、絵本や児童文学は文字で書かれた文化なので、今後、絵本の役割である子どもに言語文化の意味を伝える役目を持つ「意味論」の分析を進める予定である。

本報告では、子ども向けの絵本や詩の音韻論的な特徴を暫定的に明らかにしたが、子ども向けでない（大人向けの）書籍や詩との比較研究を行い、本研究の知見が絵本や児童文学に限られた特徴であるのか、あるいは一般的な特徴であるのかの検討が必要である。

## 結論

本研究において、絵本や児童文学の「音」に着目して作品の分析を行い、複数の共通する特性が明らかになった。分析した作品は、短い、同じテンポの音や弾むような音が多く使われていた。

日本の子どもたちに親しまれている文学や劇に見られる「音と意味の体系」を手掛かりに、子どもはどのように他者と会話し、相手を信じるように育つのかを明らかにし、語り掛けによる子どもの自然な意思の発達と、他者とともに行う意思決定に有用と考えられることばの体系を導くような研究が、今後ますます必要になってくるとと思われる。

## 謝辞

本研究は、福井県立大学戦略的課題研究推進支援制度の支援を受けて実施されました。

## 引用文献

Austin JL. (1976) How to do Things with Words. 2nd ed. Oxford, UK: Oxford University Press.

- Bruner EM.(1984)Text, Play and Story: The Construction and Reconstruction of Self and Society. Illinois: Waveland Press, Inc.
- Chomsky N.(1957)Syntactic Structures. The Hague: Mouton.
- Chomsky N.(1959)Review of B. F. Skinner: Verbal behavior. Language 35: 26-58.
- Fromkin V. and Rodman V.(1988)An Introduction to Language, 4 th ed. Florida: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Imai M. and Akita K.(2023)The iconicity ring hypothesis bridges the gap between symbol grounding and linguistic relativity, Topics in Cognitive Science, 15, 676-682.
- 今井むつみ(2024)語彙修得理論は何を説明しなければならないのか: 30年の軌跡を振り返って. 認知科学 31(1): 8-26
- 川原繁人(2023)『言語学的ラップの世界』東京書籍
- Kemmerer, D.(2023) Grounded cognition entails linguistic relativity: A neglected implication of a major semantic theory. Topics in Cognitive Science, 15, 615–647.
- Reznikoff, L.(2013)La dimension sonore des grottes paléolithiques et des rochers à peintures. Palethnologie. 10.4000/palethnologie.2060.
- 金田一春彦(1988)『日本語〈新版〉(上)』岩波書店